

Title	印度の東漸と東印度諸島最古の碑文
Sub Title	
Author	移川, 子之藏(Utsurikawa, Nenzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.1, No.2 (1922. 2) ,p.318- 322
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	口繪:馬來石碑
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19220200-0318">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19220200-0318</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 印度の東漸と東印度諸島最古の碑文

東印度諸島方面に關する人文史の考證穿鑿を試むる者は誰しも印度、波斯、支那、亞刺比亞方面よりの外來影響特に印度の影響が如何に甚大なりしかに驚かさるゝのである、獨り東印度に止らず太平洋の果にも尙印度影響の痕跡を言語上に認めらるゝと云ふ主張も有る程である。東印度諸島の土人間に吠陀の神々に彷彿たるものが有つたり正しく梵語より出でたりとさるゝ言語なり地名なりが可成に多い様である Ptolemy の時代にもスマトラの地名は梵語、巴利語で有るを見ても幾分其邊の消息は窺はれる。一番其影響圏外に有るかと思はるゝ北呂宋又はボルネオ山中の蕃族間にも幾分其形跡が臚氣ながら認めらるゝ様な氣がする（東京人類學雜誌第三十四卷第七號及 American Anthropologist vol. 23 No. 2 所載小生の論說參照）。ス

マトラ島山中の食人蕃族として知られたるバタ族に至つては特に其形跡が鮮明である、Borobodoer や Brambanan の遺蹟が在る瓜哇や、Angkor-Vat やら Angkor-Thom の廢趾を見る東埔寨 Phan-rang や Nha-rang に占波の昔を偲はする安南の南部などは取分て釋明の要は有るまい。往時印度の勢力が翕然として當方面一體を風靡した事は窺知する事が出来る。魏志倭人傳のそれすら引照認定の至難なる今日況して文獻の信憑に値するもの少なき當方面に關する適確なる古代の史實を究むるは殊更に難事である。

近時南方印度、東南亞細亞方面の金石文、古字學研究が日を逐て盛んなるは誠に慶賀に堪えない一瞥した處で M. Barth, *Inscriptions Sanscrites du Cambodge*; M. Abel Bergaigne, *Inscriptions sanscr-*



馬來古碑

es de Campa et Cambodge; L. Finot, Notes d'Epigraphie 及び壯年有爲の士 George Coedes の研究著述。F. Hultzsch, South Indian Inscriptions; Epigraphia Indica; B. L. Rice, Coorg Inscriptions; Epigraphia Carnatica; Venkaya, K. Sastri, Prog. Rept. Assist. Arch. Supr. for Epigraphy; R. Narasin-bachar, Rept. on Arch. Researches in Mysore; T. A. Gopinatha Rao, Travancore Arch. Series; J. F. Fleet, Gupta Inscriptions; A. C. Burnell, Elements of South Indian Palaeography; G. Bühler, Indische Palaeographie 等可成意を強ふするに足るものがある。

當方面に於ける金石文の研究も前者と相提携抱擁して攻究を進むれば解き難き難題も旭日霧散の日が何日かは到来するであらふと期待するものである爰に斷つて置かねばならぬ事は吾輩は梵語巴利語に就ては全然門外漢であり目に一丁字無きものであるから碑文の研究では無くして只一の紹介の勞を取るに過ぎない事である、併乍ら是に依て其専門家の注意と、同好諸士の興味とを煽起する

事を得ればそれこそ勿怪の幸である。一般に當方面への旅行者、特に瓜哇へ旅行する人は先づ首府 Batavia に上陸、有名なる熱帶植物園を有する Buitenzorg を見、瓜哇の輕井澤 Bandoeng を經て Djogjakarta (王國) の首都 Djogjakarta 及 Soerakarta (王國) の首都 Soerakarta を訪え附近なる婆羅門、佛教の遺蹟 Tjandi Mendoet, Tjandi Pawon 殊に Tjandi Boroboeoer & Brambanan などの觀光の後 Semarang を若しくは Soerabaja に出でたる上に歸途に就かるゝのか通例の様である、併し Buitenzorg 觀光の折、直ぐ其附近なる Batoe Toelis (Djambé, Tjicoenten) と呼べる所が有るから足を曳かるゝがよい。Batoe は土語にて岩石の意、Toelis は彫り銘するの義である、即ち此處には梵語の詩文を彫める岩石がある、土人は一種異様の靈石となし小さき社祠を建て、ある、香を焚き金錢を奉納して靈驗顯なれと祈る病者や祠司が居るのを見る事がある、此處に彫める文字こそ古代印度文化の名残を止めたもので西曆五世紀年代の物ならんと云ふ文體は Vogel 氏に従えば Pallava

式であるとの由である(從來 Kern, Burnell 等は此文體を Vengi と呼び、Bühler 氏の如きは Grantha と呼んで居る、年代の考證は Vogel 氏の説並に蘭古學調領東印度考査所の Bosch 氏の余に話せる處に依る)又瓜哇には古代文字 Kawi の碑文も諸所に發見する様なれ其後代の物なれば略す。併し前述の碑文は今爰に紹介せんとする碑文では無い。余の所謂當方面に於ける最古の碑文と云ふはボルネオ島の東部 Koeh 州 Moeara Kamam に於て一八七九年 K. E. Holle 氏により發見されたる四ヶの碑の事である、此等の碑は一八八一年瓜哇パタビヤ考古學人類學博物館に移された物である、安山岩の石質にて、頗る粗造なる高サ一 m 87 (甲)一 m 55 (乙)一 m 69 (丙)一 m 21 (丁)。厚さは 27 m 乃至は 88 m 斗りの物である。此碑文に就ては H. Kern 教授が一八八〇年九月十三日に和蘭アムステルダムの學會にて、始め紹介されて以來、尙一二回論文を發表された事があり、近年に到り J. Ph. Vogel 氏が再論を試みられたものである。今左に碑文を轉寫すれば

(A) Gramatah cri-narendrasya  
 Kundungasya mahitmanah  
 Putro gavarmmo vikhyatah  
 Vangakarta Yathangumah  
 tasya putra mahatmanah  
 tasyas = traya ivagnayah  
 tesam = trayanim = pravarah  
 tapo-bala - damanvitah  
 cri-Mulavarman rajendro  
 Yasiva bahusvarunakam  
 tasya yajnasya yupo yam  
 divjendras = samprakalpieh  
 (右譯) 隠れ無き大王 Kundunga に、一種族の始祖に御坐します、尊く高き Agvarman と申せらるる名高き御子御坐せり、三ツの生贄の燎火にも似て、Agvarman に英邁の御子三方御坐せり、其中に特に優れて峻嚴と自制と力を具へ給へる王者の王は隠れ無き Mulvarman にて御坐します、Bahusvarnaka の生贄の餐蕙を張り神人を犒へ給へるまである其生贄の紀念としてアリアン族の頭

目、此碑を建設せられたのである。）

(B) *Śrīmatō nṛpamukhyasya*

*rājñah cṛi-Mūlavarmmanah*

*dānam puṇyātame kṣētre*

*yad = dattam = Vaprakeçvare*

*dvijatibhyo gnikalpebhyah*

*viṅçatir = ngosahasrikam*

*tasya puṇyasya yūpo yam*

*krto viprair ihāgatai(h)*

(右譯、隱れ無く高く坐す君、Mūlvarman。生

贄の火にも似たるアッマンへと、Vaprakeçvara

の野に、千有二十の牡牛を下し賜へる時、御功

徳を表さんが爲め此處に集へる祭司共碑を建て

紀念せしめたる。)

(C) *Śrīmad-virāja-kirtteh*

*rājñah cṛi-Mūlavarmmanah puṇyam*

*Śrīvantu vipramukhyāḥ*

*ye çanye sādhaveḥ puruṣāḥ*

*bahudāna-j-vadanam*

*sakalpavṛikṣarṇ sabhūmidānaḥ = ca*

*teṣām = puṇyagaṇānam*

*yūpo yam śhapito vipraih*

(右譯、祭司の中の大祭司否あらゆる信仰の人よ

普く知れ。榮ある王の下し賜へる澤山の家畜仙

樹と土地と。幾多敬神の御功績を頌くまつらん

其爲めに此碑を建つ、)

(D) *Sagarasya yathā rājñah*

*Samutpanno Bhagirathah*

.....

*Mūlavarma*

(右譯、Bhagirathah は Sagara より生れさせ給へ

るが故に ..... Mūlvarman .....)

(以上譯解は Kern 及 Vogel 氏に依る)

此等の頌徳碑文は印度の東南部 Kāncchi に都し西

曆四世紀より八世紀頃に亘つて隆盛なりし Pallava

王朝時代の書體の梵語にて書かれ、碑文の比較研

究、書體の考證に基く時代鑑定に依れば西曆四百

年代の物ならんと云ふ。Ratoc Toelis の碑文に比

すれば略一世紀以前に遡るものがある碑文中の王

名 Kundunga は蕃鼻を有すれ共 Mūlvarman は正

しく印度アーリア系の名なりのものと思ふ(II. Kern, Verslagen en Mededeelingen der Kon. Akademie van Wetenschappen, Afdeling Letterkunde. Bd. VII, X, XI Amsterdam 1881-1882.)

J. Ph. Vogel, Bijdragen tot de Taal-, Land- en Valkenkunde van Nederlandsch-Indië, Deel 74, Aflivering 1-2, 1918.)

今は只此等碑文の存在を紹介する迄に止め置くべ

さも佛頭印度支那發見占城の Bhadravarman の碑文として知らるゝものも恐らくは同時代若しくは少しく以後のものなるべきか、今は移されて東京河内東洋學院附屬博物館庭内にあれ共碑面磨滅して文字定かならざるものであつた、又他にも馬來半島 Wellesley 地方發見 Buddhagupta の碑文として知られ同じく西曆四世紀年代のもの有れ共、今は東印度諸島發見の分に限り爰には略す。

移 川 子 之 藏